

指扇小だより

教育目標 **やり抜く子の育成**

かしこく やさしく たくましく あたたく

令和8年4月28日 第2号

さいたま市立指扇小学校

〒331-0078

さいたま市西区西大宮1丁目49-6

電話 048-623-0133 FAX 048-624-2200

<https://sashiogi-e.saitama-city.ed.jp>

近くにも壊れない距離

校長 小松 伸弘



「入学おめでとう集会」の様子

校内を回っていると、子どもたち同士の関わりが少しずつ深まっているのを感じます。新しい学級が始まって一か月。友だちとの距離も近づいてきました。

その中でどうしても避けられないのが、仲の良い友だちとの衝突です。「仲がいいはずなのに、なぜ喧嘩するのだろうか」と感じるかもしれませんが、実際のところ、近づくからこそ起きる喧嘩もあるのです。

人との関係には「ここまでは踏み込んでよい」「ここからは相手の領域」という目に見えない境界線（バウンダリー）があります。この境界線は関わりの中で少しずつ形づくられていきます。仲良くなると境界線は自然と近づきます。その際に、片方が「これくらい大丈夫だろう」と思っても相手の感覚が違ふと行き違いが起こります。それが、喧嘩です。ですから、喧嘩は仲が悪いから起きるものではなく、仲良くなって近づきすぎた結果起きるものであるとも言えます。

もちろん、すべての喧嘩がそうとは限りません。相手を深く傷つけてしまうものや大人がしっかりと関わるべき場面もあります。一方で、関係をよりよくしていくために、子どもたち自身が乗り越えることに意味のある喧嘩もあります。衝突を未然に避けようとするのではなく、その後どのように言葉を交わし、お互いの距離を調整し直していくかが大切です。

こうした経験を通して、子どもたちは「近くにも壊れない距離」を学んでいくのです。

喧嘩が起こったとき、私たち大人はどのように関わればよいのでしょうか。

子どもが「こんなことをされた」と訴えてきたとき、私たちはつい、誰が正しくて誰が悪いのかを決めたくなくなってしまいます。しかしながら、子ども同士の関係が揺れている場面では、出来事の見え方もその時の気持ちも、子どもによって違ってきます。

まずは「嫌だった（悔しかった）んだね」と、子どもの気持ちをそのまま受け止める。そして、時には一歩引いて、相手はどんな気持ちだったのか、どうすれば自分の思いを伝えられたのかを一緒に考えてみる。——そんな時間を持てるとよいと思います。学校でも、私たち教員は、起きていることを一つひとつ確認しながら、双方の気持ちを言葉にしていきます。喧嘩ゼロを目指すというよりも、喧嘩をふり返る機会を通して相手の気持ちや立場を想像させて、関係の持ち方を考えさせていくのです。

子どもたちが自分の気持ちを上手に伝えられるように、そして相手の気持ちを汲み取ることができるよう、学校と家庭で協力して支えていければ幸いです。

参考：「わたしはわたし。あなたじゃない～10代の心を守る境界線『バウンダリー』の引き方～」 鴻巣麻里香著、2024)